

月刊

いじろのとも

第九卷

九月号

教師道は菩薩道

教師の道は

菩薩の道

それは

自己を磨き

(自灯明)

他者を救う道

(法灯明)

人多き

人の中にも

人ぞなき

人になれ人

人になせ人

お布施いじろ

お布施ごころの

無い人ほどが

人からお布施

もらいたがるが

布施をもらえど

感謝はしない

人生を考え直して

みたい人は（五六）

『聖書』解説（三三三）

マタイ福音書の五章から七章にわたる「山上の垂訓」と呼ばれる部分の三十一回にわたる解説を先月号で終わりました。今月号を最終回にしたいと思い、初回から読みなおしてみました。

読みなおしてみても、キリスト教の教えの神髄はこれであり、かなり尽くされているのではないかと思えます。

仏教との関連もかなりふれました。私は、常々、四聖の教えとして、宗教は一つ、悟りの境地は一つ、と言い、キリスト教や仏教という宗派を超えて世界の宗教を統一したいという希望をもっています。こうした解説もそうした観点から書いています。

以下、キリスト教をめぐる雑多なことを少し述べますが、これまでの繰り返しになることもあると思います。まとめとしてお許し下さい。

仏教には、他力と自力の問題がありますが、そうした観点から言いますと、普通、キリスト教は他力と考えられるのではないのでしょうか。でも、私はそうとは思いま

せん。何度も述べてきましたように、キリストは「神に一人静かに奥まった部屋でお祈りするよう」に言われています。でも、それを実践するキリスト者を私は知りません。禅宗の開祖である達磨大師ですら、面壁九年で悟りを開いたとされています。一人静かに壁に向かつて九年も祈り続けて、やっと悟りに達したというわけです。

ただ、イエス・キリストは早世しましたので、教会やお堂も作りませんでした。ですから、そうした祈りの手法を弟子たちに伝えることができなかったか、あるいは、伝えても不肖の弟子ばかりでしたので、重要さや意味が理解できなかったとも言えます。

ですから、イエスが説いた元来のキリスト教は他力だとは言えません。仏教では、浄土真宗が他力本願と言われていますが、私は、他力も自力も、真の宗教にはないと思っています。私の理論ですと、自己の働きを重視する宗教が自力で、他己の働きを重視するのが他力だと解釈できますが、真の解脱に達するためには、両者の統合があるわけですから、自力も他力も統合されなければなりませんと言えるのです。

二十年ほど前から、自力と言われる禅宗とキリスト教との交流が行われていますが、とてもよいことだと思えます。キリスト者も、修行の方法として坐禅のような瞑

想法を取り入れることが必要のように思えます。

でも、私の、ヨーガ（瞑想法）と真言密教修法（しゅほう）との体験から申しますと、坐禅だけで解脱に行けるのかどうか、私には自信がありません。ですから、坐禅だけではなく、白隠禅師も実践された内観の秘法（それはヨーガの一種）や、ヨーガや、真言密教の修法などを採り入れるべきだと思います。私は、真言密教の修法ほどよくできた修行法はないのではないかと思つています。多分、最高ではないでしょうか。なぜなら、坐禅はもっぱら身体（からだ）を制御することを中心にしていますが、密教は「からだ（身）」と「あたま（口）」と「こころ（意）」の働きの全てを総合して、仏と一体となること（入我我入）を目指すからです。因みに、あたまを主とする修行法は、念仏を唱えたり、唱題や称名したりする方法ですし、また、こころを主とする修行法は、修行法と言えるかどうか分かりませんが、ただ、仏を信じ、仏を思う方法です。

さて、キリスト教は愛（アガペー）の宗教と呼ばれていますが、仏教も全く同じ他者への愛を説いています。特に、大乘仏教ではそれが顕著です。ただ、仏教では、愛とは言わず、慈悲とか、それに「大」の字をつけて大慈大悲と呼んだりしています。

私の理論では、自分の中の髄識（潜在意識・無意識）の他己に宿る神識（自然識・如来蔵識）が、自己に宿る生命識（煩惱識）の垢によって覆われなくなったとき、愛も慈悲もともに、輝き出ることができると考えるのです。でも、それは、無意識での事ですので、意識してすることはできません。こころを磨く長い修行を通じてはじめてできるようになることなのです。

なお、これまで取り上げてきましたマタイ福音書の続きの八章には、イエス・キリストが病気を治したり、さまざまな奇跡を行われたことが書かれています。果して奇跡が実際に行われたかどうかは、後の作り話が多く、真実は分かりません。でも、病気は気からと言われまので、この人は病気を治す力をもっていると信じるだけで、治る病気はあると思います。

でも、奇跡を強調しますと、手品まがいのことをして人を惑わし、奇跡をしたように見せかけることで、人を信じさせる、誰とは言いませんが、宗教家も出てきます。いま、仏教がブームだと言われています。仏教だけではなく、宗教に関心がいくことはいいことだと思えます。でも、それがマスコミやジャーナリズムの一时的なものに終わらないことを祈りたいと思います。

次回からは新たなシリーズにしたいと思つていきます。

自作詩短歌等選

平等とは与えること

平等とは
力ある人が
力ない人に
力を与えること
財のある人が
財のない人に
財を与えること
幸せと思う人が
不幸せと思う人に
幸せを与えること
もつものを
他者に誇るな
お布施せよ

お布施のこころ

日々感ず
お布施のこころ
もつ人が
なんと少なき
今の世よ

人類滅ぶ

農業を
粗末にすれば
民滅び
国が滅んで
世界が滅ぶ

子どももの農業体験

農業を

させて子どもに
土触らせて
作物育てて
収穫させる
その作物の
恩恵受けて
それで人間
命をつなぐ

この体験が

子どもには
欠かせぬことと
知るべしぞ

これぞ

物と生命
精神の
かかわる姿の
ダイナミズム

世が滅ぶ

他人との
付き合い方の
分らない
大人が増えて
世が滅び行く

コミュニケーション

コミュニケーションとは
その人の生活に
重要な意味を持つ
特定の誰かと
持続的に
こころが
通うということ
それによって
こころが
安定するということ

時代の変化

これまでの
繁栄支えた
年代は
お国のための
教育と
たとえ悪評
されようと
他己を育てる
教育で
あつた事実
は
大切だ

いま閉塞感に
導きし
年代受けし
教育は
自己主張のみの
教育で
他己の萎縮が
甚だし
政府が打ちし
対策も
この時代変化に
気付かず
従来型の
政策を
もし平凡に
続ければ
失敗するが
必定なのだ

日本の若者

日本ほど
若者たちが
自己に閉じ
他己を弱めた
国はない
親を疎んじ
人に冷たい
国はない

破滅する薬品

人類が
自ら生みし
薬品で
人類だけに
止まらず
自然全ての
破滅もたらず

テレクラ少女売春

豊かさの
中のテレクラ
売春で
女の子たち
得るものは
贅沢品と
遊ぶ金
失うものが
あることに
気づきもしない
病理の深さ

自作随筆選

日本の若者たち

いま、毎日新聞に「閉ざされた心に」と題するシリーズ記事が載っています。九月八日の初日に、「子ども『異変』どうつかむ？」という見出しで、いまの若者たちのいくつかの心身の異変があげられていますが、その最後に「親子の距離」と題して、東洋大学の中里至正教授（社会学）の研究が紹介されています。それは、日本の中学・高校生の、親との心理的距離を他の六カ国のそれと比較したものです。その結果が、近さをパーセントとして表されています。それによりますと、キプロス89%、トルコ88%、米国80%、中国72%、ポーランド70%、韓国47%なのに対し、日本は14%であったといえます。また、思いやり意識を調べた結果、やはり日本が最低だったそうです。

この記事をみて、なるほど同感しました。

四月号の自作随筆選で「心の教育中間報告」と題する随筆を載せましたが、その中で日本の高校生の規範意識がアメリカや中国に較べて著しく低いことを紹介しまし

た。もう一度参照して頂ければ幸いです。ここで紹介しています中里教授の調査も、これと軌を一にするものと言えます。それは、私の「自己・他己双対理論」で言いますと、他己の萎縮であり、枯渇であり、縮退であると言えるのです。

人間は、解脱したり、悟りを開かないかぎり、誰か他人とそころを通わせていないと、安心したり、生き甲斐を感じたりすることができません。

ところが、個人主義や民主主義が行き過ぎますと、人は他者とそころを通わすことができなくなってくるのです。特に、日本のように、人間を超越し、人間を支配する、絶対な神ではなく、死んだら誰でもが成れる身近な仏さま（成仏）の信仰をもち、他者とそころを通わすことを大切にす文化に、絶対な神との約束で他者と関わる文化から生まれた個人主義が入りますと、絶対な神の信仰もなく、その代わりとしての他者とそころを通わすことの価値も失われ、まさに、他己の全てが働かなくなってしまうのです。

これが、いまの若者の「異変」を作りだしている、心理学的メカニズムなのです。そうした異変は、一方では、他者との関わりのできなさ、つまりコミュニケーションの下手くそさ、規範意識の希薄さ、過去の文化である伝

統や習慣の無視（それは大人の価値や言いつけの無視でもある）、他者のこころを感じる感性の鈍麻などとして現れると同時に、他方では、自分自身の心身の異常さ、つまり刹那的な欲望の追求、不安傾向の増大、自信の欠如、情緒的不安定、抑制の効かなさ（すぐにキレル）、身体への異常な関心や身体的な異常の露呈（すぐにムカツクと言う）、生活力のなさなどとして出現するのです。これらは、まさに自己肥大、他己萎縮の兆候以外のなものでもありません。

酒鬼薔薇聖斗事件をはじめ、親父刈りなどの強盗や若年者による殺人の増加傾向、学校での陰湿ないじめ、自殺の増加、女子生徒の援助交際、学級崩壊、などなどこれまでに無かった若者の問題行動の殆どは、こうした心理から生み出されているのです。

彼らは、「過去（伝統・風習・慣習・規範・社会的価値など）」を失い、社会定位ができなくなっています。それは、実は、「未来（夢・理想・願いなど）」をも失うということなのです。そうなりますと、時間は、「刹那」的なものでしかなくなってくるのです。例えば、援助交際では、大人に優しく可愛がってもらって楽しいし、お金をもらって楽しい。それが、将来（未来）にどんな意味をもっているのか、夢や理想を欠く彼女らには、ま

ったく考えることはできないのです。

こうした自己肥大・他己萎縮は、どうすれば直すことができるのでしょうか。実は、こうした若者の傾向は、日本人の皆の傾向でもあるのです。

ですから、これを直すには、まず大人が自己を慎み、他己を發揮させなければなりません。でも、大人は最早遅れです。いま、政界も官界も経済界も学界もすべての社会領域で、価値が混乱しています。いま、自分の事を考える以外に、日本全体、世界全体として何をなすべきか、皆が考えを失っています。ですから、大人には、期待できません。しかし、いま、教育で若者に手を打つたとしても、すぐその効果は現れませんから、いまの学齢期の子どもたちが引退するまでの今後五十年ぐらいは日本はますます悪くなっていくと思います。

でも、手を打たなければなりません。その打つ手は、民主主義を前提として、権利義務で言いますと、権利主張を抑え、義務の遂行をもつと若者に奨励しなければなりません。伝統を重んじさせなければなりません。しかし、こうした教えが真に効果を上げるためには、大人が子どもに愛情を与えなければなりません。でも、それが、最も難しい課題です。ハードな訓練をしても、他者を思いやる優しいところは育たないからです。

正岡子規の神秘主義

九月三日付けの毎日新聞に「正岡子規の神秘主義」と題する記事が載りました。執筆者は玉城徹（たまき・とおる）という歌人で、毎日歌壇選者の方です。

私はそれを見て、「ああそうか、そうだったのか」と見出しだけを見ただけで納得しました。といいますのは、もう六〇七年前になるでしょうか、この『こころのも』を書きはじめ、歌らしきものを作りだして、歌の本を何冊か買って読んでいた頃のことなのですが、これはすごいとおもったのが、子規の次の歌だったのです。

真砂なる 数ある星の 那の中に

我に向かいて 光る星あり

この歌の解説を見ましたところ、名作とありましたが、この歌は、日本人の近代自我の確立を示すものだとありました。私は、その評価が納得できなかつたのですが、今回の記事の見出しを見て、子規がこの歌を作った本当の意味が理解できたように思つたのです。

記事によりますと、「子規には、すでに若い頃に一種の神秘体験があつた。それは、ドイツ中世の神学者、マイスター・エックハルトによって『離脱』と名づけられ

る体験と一脈通う性質のものだと見ることが出来る。子規の神秘主義は、むしろ、東洋的だが、何らかの宗教に媒介されたものとは、今のところ、考えられない。」とありました。

私は、前掲の歌を見たとき、そこに宗教的な雰囲気を感じていました。

その頃私は、徳島県三好郡山城町の標高五百㍎足らずの所に住んでいました。今もそうですが、私は、夜は八時〜九時の間には床に就きます。そして、日によって多少違います。朝は三時〜四時前後には目覚めます。

ある日、目覚めてすぐトイレに行き、真東に向かつている窓から向こうの山の上を見ますと、まさに、私に向かつて光るほしがある、と感じたのです。そして「ああこれが子規の歌の世界なのだ」とすぐ直観しました。

実は、その星は明けの明星、つまり金星だったのですが、このきらきらと光る金星は、真言密教では虚空蔵菩薩の化身なのです。この明けの明星を見ながら、ひたすら虚空蔵菩薩の真言を毎日一万遍百日間唱える「求聞持法」を行うという、宗教的な星だったのです。

いまは、子規がどんな神秘体験をしたのか、知りたいという思いがしています。私もそうですが、子規も星にも花にも威厳を感じていたように思いますので。

釈尊のじつば(七二二)

法句経解説

(二五〇)もしもひとがこの(不満の思い)を絶ち、根絶やしにしたならば、かれは昼も夜も心のやすらぎを得る。

特に難しいことばはありません。もし、不満の思いを根絶やしにしたら、心の安らぎを得る、というわけです。もしそうできれば、誰でもそれを望むと思いますが、普通はなかなか不満の思いを絶つことはできません。何がなくても、何ができなくても、満たされていないければ、そうはならないからです。

たとえば、生命を維持するうえで必要不可欠な食べ物について、もし、食べ物がなければ、普通、不満の思いがおこるでしょうし、食べ物までいなくても、酒や煙草などの嗜好品がなくても、人は不満をかこちます。

また、最終的には、もし今、自分が死んだら、人生でやり残したことがある、という思いがあれば、不満の思いを根絶やしにしたとは言えません。自分だけではなく、重要な他者が死んでも同様です。なぜ、自分だけ残して死んだ、あるいはこれからと期待していたのに、死んで

しまった、これで自分の望みが絶たれた、という思いがあれば、不満の思いを根絶やしにしていけないように思えます。普通は、そう思ってしまうと思いますが。

でも、修行すればそれを超えた境地に至ることができるとです。それを、分かりやすい言葉(?)で言えば、老子の「無為而無不為(為すことなくして、為さざることなし)」が、まさにそれに当たります。

この「為す」は、英語で言えば to do です。動詞の代表です。ですから、ここにいろいろな動詞を入れることができます。たとえば、「食べる」を入れますと「食べることなくして、食べざることなし」ですし、「飲む」を入れますと「飲むことなくして、飲まざることなし」となります。

食べないのに食べないということがない、とは形式論理的には矛盾と言えますが、でも、心境としてはあり得るのです。それは、食べ物がなくても、それを思い煩わない、という境地です。食べなければ、栄養失調になつてしまふとか、病気になるつてしまふとか、最終的には飢え死にするかもしれない、というわけですが、それでも、思い煩わない、という境地なのです。

因みに平成九年(第八巻)六月号に、「やり残したものは無い」と題して、次のような詩を載せていました。

無為而無不意とは、人生にやり残した事が、ないこと
心の底から、思えるということ

こうした境地に達した時、人は、「昼も夜も心のやすら
ぎを得る」ことができるのです。そうなりたいと思っ
てなりません。修行すれば誰でもそうなれるのです。

(二五一) 情欲にひとしい火は存在しない。不利な
般(さい)の目を投げたとしても、怒りに等しい不
運は存在しない。迷妄にひとしい網は存在しない。
妄執にひとしい河は存在しない。

実はこれと似た偈が平成九年五月号で、出てきました。
それは、次のようなものです。「(二〇二) 愛欲にひと
しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、憎悪に
ひとしい不運は存在しない。このかりそめの身にひと
しい苦しみは存在しない。やすらぎにまさる楽しみは存
在しない。」その解説も、参照頂ければ幸いです。

ここでは、欲の火は、山火事のように消しがたい、と
解説しています。欲とは、私の理論で言いますと、「情
動」の中の欲望で、それは、主に次の三つです。 食欲
(物欲や金銭欲も含む)、 性欲(子孫繁栄欲も含む)、
優越欲(他者より優越したい、勝ちたいという欲)。

「怒りに等しい不運は存在しない」とは、自分に執ら
われた怒り、私怨をもてば、人は不運を味わうことにな
る、ということなのです。ことわざにも、「人を呪わば穴二つ」
といえます。人は常に許すことが大切なのです。相手が
反省しないのに許すことはとても難しいことですが。
でも、釈尊もこの法句経で次のように説かれています。

「(三) 『かれは、われを罵った。かれは、われを害し
た。かれは、われにうち勝った。かれは、われから強奪
した。』という思いをいだく人には、怨みはついにやむ
ことがない。／(四) 『かれは、われを罵った。かれは、
われを害した。かれは、われにうち勝った。かれは、わ
れから強奪した。』という思いをいだかない人には、つ
いに怨みがやむ。／(五) 実にこの世においては、怨み
に報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みのやむこ
とがない。怨みをすててこそやむ。これは永遠の真理で
ある。」(平成四年第三巻五月号で解説)。

「迷妄にひとしい網は存在しない」ということですが、
この迷妄とは、仏教用語で、広辞苑によりますと「物事
の道理に暗く、実体のないものを真実のように思い込む
こと」となっています。そうだとしますと、世の中を間
違って見ているわけですから、それは、一網打尽と言え
るほどの間違いだと言えます。

また、次の「妄執にひとしい河は存在しない」ということですが、この妄執は広辞苑によりますと「迷妄の執念」ということですから、さらに悪いことになります。それは、人生の全てを押し流してしまふ河にたとえられる、というわけです。

(二五二) 他人の過失は見やすいけれども、自己の過失は見がたい。ひとは他人の過失を糊殻(もみがら)のように吹き散らす。しかし、自分の過失は、隠してしまう。狡猾な賭博師が不利な骰の目をかくしてしまうように。

いつも思うことですが、他人の過失を問題にするときは、誰でもが自分の同じ過失は棚上げにしています。勤務先の大学でもしょっちゅう感じます。

それは、卑近な例でいいますと、自分は偏食がきついの、子どもには自分の好きなものを食べさせようとしないで、好き嫌いを言わせない親のようなものです。

特に学校の教師や坊主は、人を教え導く立場にある人ですから、自分ができもしないことを生徒や信者に言うてはならないのですが、いまは、平気でそれを言っています。

たとえば、高校生が酒や煙草をやることは、法律で禁止されていますが、多くの高校生はどちらもやっています。でも、これをやめさせるのに、先生がやっていては説得力はありません。法律で禁止されているから守らなければならぬ、というのが一番まともな理由ですが、でも、二十才になつたら急によくする理由が説得的ではありません。煙草は自分の健康にも悪いし、他人にも害を及ぼしているわけですから、誰でもすぐにやめるべきですが、なかなか心理的に依存していて抜けられません。

なのに、高校生の過失は厳しく糾弾しようとしません。また、法律だから守るべきだと言ってみても、交通規則は法律ですが、全員と言つてよいほど、誰も守っていません。なのに法律だから守らなければならないといってみても説得力はありません。

いまは、個人主義の時代ですから、特に自分のことを主張する傾向は、積尊の時代の比ではないと思います。また、民主主義の時代ですから、善悪真偽も多数決で決められます。ですから、ますます悪いことは隠し、他者の過失はますます吹聴する傾向を強めているように思います。

難しいことですが、「自分には厳しく、他者には優しく」をモットーとして生きていきたいものです。

後記

一、讃岐は日照りが続き、高知にある讃岐の水瓶・早明浦ダム貯水率が三十%台に落ち込みました。

二、私の作っている畑も、カラカラでそばの池から、買った水揚げポンプで何回か水やりをしました。池ももうかなり干上がっています。でも、お蔭でサトウキビと大豆は、とてもよくできています。指導して下さっている方も、ほめて下さっています。

三、九月七日締切りの学校教育研究センター紀要の論文を提出しました。題は、「人権問題に関する基礎的研究（一） 若干の哲学的・人間精神学的考察」です。内容は、これまでに書いていたものをまとめたものです。講演資料と『ここらのとも』の随筆で人権問題に関するもの、枚数制限いっぱい入るだけ入れて七編になりました。共著者として、かつての現職のゼミ生だった岩井勉氏と佐々木博人氏に加わって頂きました。日頃からデイスカッションをして頂いていたからです。

四、ご希望の方がありましたら、お申しつけ下さい。お送りいたします。

五、実は、論文は、全く新しいものを書きたいと思っていたのですが、いろいろなことがあって間に合わず、右のようなものになりました。新しく書きたい点は、一つ

は人権をめぐる憲法問題です。もう一つは、憲法と直接的に関係してはいますが、民主主義のありかたです。いま、民主主義が衆愚政治（オクロクラシー）に陥っていることは七編の中に入れてある論文でも述べていますが、それを避けるための具体的な考察をもっと詳しくやりたかったです。でも、間に合いませんでした。

六、もう何度も書いてきたように思うのですが、民主主義を支える哲学で間違っていると思える点は、人間は理性的で、啓蒙が進み、皆の理性が開発されれば、皆で議論すれば、正しい判断に達することができる、とする点です。私に言わせれば、それは、全く間違っています。

月刊 ここらのとも 第九卷 九月号 (通巻 一五号)	平成十年九月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

